

2024 生徒会誌「青桐」より

孤独の轍^{わだち}

校長 中村訓子

一枚の写真があります。

「オポチュニティの轍」と呼ばれるその写真は、火星探査機オポチュニティが自分の来た道のを振り返って写した写真で、黄色味を帯びた空と赤味を帯びた荒涼とした大地に二本の轍がくっきりと写っている写真です。

オポチュニティは当初その活動時間を90ソル（火星の1日を表す単位で、1ソルは地球時間にして、約24時間40分）と想定されていましたが、実際には2004年1月の着陸から14年半の長きにわたって活動を続けました。

ほぼ同時期に着陸して探査に入った姉妹機のスピリットも5年間は持ちこたえて探査を続けていましたが、火星のマイナス100度という極寒の中で通信不能となりました。

砂嵐の吹く荒涼とした火星で、たった一台で探査を行うというミッションを果たし続けることは想像を絶することです。その中で撮った一枚が「オポチュニティの轍」でした。そこには、生命の存在が感じられない星で自らがたどった道のを見つめるまなざしと同時に一切の感傷を排除した孤独が感じられます。

荒涼とした火星の大地に刻まれた二本の轍は、探査機オポチュニティのものですが、考えてみれば、私たちもまたオポチュニティと同様に自分自身の轍を刻みつつ生きています。生まれてから最期の時まで轍は刻み続けられ、それは誰か

の轍と交錯することはあっても刻まれた道筋はその人の唯一無二のもので、同じ轍は存在しません。そう思うと、人は誰かとともにいる、いないにかかわらず、その存在の根本のところには常に孤独があると言えるのかもしれませんが。普段はさまざまなことに取り紛れて目を向けることはなくても、私たち一人一人はその奥底に孤独を抱えて生きている。

オポチュニティは、火星で起きた観測史上最大の砂嵐が原因で、2019年、そのミッションに終了が宣言されました。2018年6月に通信が途絶えてから8か月、オポチュニティの再起動を期待してNASAから送信されたコマンドは実に1000回以上。想定をはるかに超えて、過酷な旅を続けた孤独な探査機とともに、ミッションにかかわっていた誰もがそれぞれの人生の轍を刻んでいたに違いありません。科学や技術の発展に寄与するということはもちろんですが、オポチュニティの孤独な旅を見続けていたからこそ、自分の中にある孤独の価値に気づき、「孤独をともにする」ことが続くことを願っていたのではないかと思います。1000回以上のコマンドにはその願いが込められていたのでしょう。

ミッション終了の宣言が出されるその日、管制室には多くの人が集まってきたといいます。そして、ミッション終了の宣言が出されたときには、だれもが泣いていたそうです。

逆説的な言い方になりますが、誰かと真につながるには「孤独を知っている」ということが必要なのかもしれませんが。さみしさを紛らわすために人とつなが

る。体面を守るためにだれかととりあえず一緒にいる。それは、世を渡っていくための処世術として必要なことかもしれませんが、薄く、もろく、刹那的なつながりでしかありません。自分の中にあるさみしさや人とつながりたい気持ちの更に奥底にある孤独に向き合うことは、これまで見ないようにしてきた自分や案外いい加減に扱ってきた自分自身を知ることにつながります。そして、他の人の孤独にも思いをいたすことができれば、そこに孤独を知るものとしての連帯や深い共感が生まれることもあるでしょう。

探査機の名前の「オポチュニティ」には「機会、好機」という意味がありますが、「チャンス」とは違い、そこには偶然性は含まれていません。目的をもって、あるいは意志をもって準備したところに生まれる好機、すなわち「自らの手で勝ち取った機会」や「努力を重ねてつかんだ好機」を示す言葉です。

この『青桐』に綴られた高校生という時間そのものは卒業と同時に終わってしまします。けれども、この時代に刻んだ轍は次の時代につながっています。何者でもないこの時代に、そして、思春期という心が揺れ動く時代に、自分と自分の孤独に向き合うことは、皆さんの未来の「オポチュニティ」を開くと信じています。

参考 『宙わたる教室』 伊予原 新

Natgeo.nikkeibp.co.jp ナショナルジオグラフィック

Wired.jp さらば、火星探査機「オポチュニティ」

